２０２３年６月１１日　　朝 礼 拝 順 序 （午 前 １０ 時 半）　　（№２４）

司式　杉山昌樹牧師

前　　奏　　奏楽　堀口愛子姉

開 会 招 詞　イザヤ40章28－31節

＊ 賛　美　歌　１３:１（ソングシート）

1. 万のもの　永遠にしらす　御父よ、いま恵みを　下し給え、御名をほむる　我らに。　アーメン

＊ 開 会 祈 祷

罪 の 告 白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　　戒　　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛　美　歌　３：２（ソングシート）

2. 人となりし　救いの御子、主イエスよ、利き剣の　御言葉もて示し給え　まことを。アーメン

公同の祈祷　５　使徒信条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よ

みに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。
かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。
われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。　アーメン。

献　　金　（黒）教会活動・（赤）海外医療　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

子ども礼拝

聖　書　朗　読　　ホセア2章20－25節（旧約聖書1405頁）

フィリピ3章7－11節（新約聖書365頁）

説　教・祈　祷　「追い求めるもの」杉山昌樹牧師

＊賛　美　歌　３９:１，２（ソングシート）

1. わが身の望みは　ただ主にかかれり、主イエスの外には　依るべき方なし。
（おりかえし）わが君イエスこそ　救いの岩なれ、救いの岩なれ。
2. 風いと激しく　波立つ闇夜も、みもとに碇を　おろして安らわん。（おりかえし）アーメン

＊主　の　祈　り　　祈祷書1

天にまします我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊頌　　栄　　６８

あまつみたみも、地にあるものも、父、子、みたまの神をたたえよ。アーメン

＊祝　　祷

後　　奏　（黙祷）

報　　告　司会那珂百合子長老・受付加藤良明長老（次週：門脇献一・那珂百合子長老）

礼拝当番/献金当番　杉山陽一、堀口有希/横山芽愛、横山遥音（次週）桑原和子、水流幸子/堀口敦也、番場燈路

本日　受付　１階：佐藤紀子執事　２階：森永美保執事 ／ZOOMホスト・録音：大日南悠

次週　受付　１階：大日南信也執事　２階：藤井牧子執事 ／ZOOMホスト・録音：番場験也

フィリピ3：7ー11「追い求めるもの」

伝道者パウロ

　今日の所もまた、この手紙を書いたパウロが自分について語るところです。教会の迫害者、教会を一所懸命壊して回っていたパウロが、ある時イエス様と出会って、人生が変わったのでした。それまでと全く逆の生き方をするようになって、伝道者パウロとなります。それは一体どういうことだったのか、パウロ自身が自分の中で何が起きたのか、ということを語るのがこの個所です。それで今伝道者パウロということを言いました。そもそも、伝道という言葉は、教会用語です。道を伝える、キリストの道があって、それを伝える、ということですが、では、キリストの道とは何でしょうか。それはキリストを得ることだ、とこのところでパウロは言っています。

伝道はどこから

　そこでまず確認したいのは、伝道とは、方法論ではないということです。伝道の中心にあるのは、イエス・キリストです。今日の所で、パウロは何度も、「キリストのゆえに」ですとか「主キリスト・イエスを知る」、「キリストのうちにある」、「キリストへの信仰」というように、ほぼすべての節で「キリスト」と言います。彼がこの手紙で、表そうとしていることはすべて、この私がどうキリストと向き合ったのかです。伝道者パウロの伝道、それは、自分自身にとってのキリストを、言葉と態度で明らかにすることです。そしてこのことは私たちの教会にとっても全く同じはずです。わたしたちがここで教会として集まっている、教会として存在しているのですけれども、それはただ存在するために存在しているのではありません。私たちのイエス様を言葉と態度で明らかにしていくのです。あえて言いますと、教会はイエス様を明らかにするための道具です。そのための神様の道具です。この地上で、この地域で、イエス様を明らかにするのです。そして、わたしたちがイエス様を明らかにするためには、今、この礼拝において、私たち自身にとってのイエス様が明らかにならなければなりません。そうしますと、伝道の出発点はいつでも、この礼拝であって、ここに命があるか、ここにイエス様がいるか、ということになっていくはずなのです。そして、まさに、私たちにとってイエス様とは何か、を確かめるためには、イエス様を明らかにする先輩であるパウロが何と言っているのか、が重要なのです。

どう変わったのか

　それで、改めて確かめたいのですが、一体パウロはここで何を言っているのか、です。すでに先週読みました1ー6節でも彼の生き方が語られていました。特に5，6節ではヘブライ人として、完全な人生を歩んでいた、ということが言われていました。しかし、そのような生き方は、「肉に頼る生き方だ」ということもまた言われました。この場合の「肉」とは自分自身を頼みとする生き方でした。自分はあれもできる、これもできる、こんなにいろいろなものを持っている、だから大丈夫と言うありかたです。ところが、今日の7節では、この部分がまさにひっくり返ったと言います。その所で、ヘブライ人としての完璧さは以前は「私にとって有利だった」とあります。もっとはっきり言いますと、得だと思っていたのです。いい家に生まれて、学問をして、自分が正しいと思うことを、どんどんやって行く、これこそ、人間のあるべき姿、と思っていたのです。こうして人間としてしっかり生きていくことこそ正しい、パウロは確かにそう思っていたのです。しかし、ある時にパウロはこれを「損失と見なすようになった」とはっきり書いてあります。その理由は、「キリストのゆえに」とあります。もちろん、これは、使徒言行録にありますイエス様との出会い、そこで人としての考え方、物の見方が180度変わった、という出来事が前提になっています。問題は、そこで実際のところ何があったのかです。なぜ得だと思っていたものを損と思うようになったのかです。使徒言行録には、その時のパウロの心の変化は書いてありません。けれども、今日の所には、パウロの中で起きた変化がはっきりと書かれています。

イエスを知る

　このところの8節を見ますと、「私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさ」とあります。イエス様にこそ、最高の価値があると分かった、というのです。マタイによる福音書にイエス様がたとえ話を語るところがあります。高価な真珠を探している商人が登場します（マタイ13：

45,46）。彼は、最高の真珠を見つけると、すべてを売り払って、その真珠を迷うことなく買取ます。この商人はいろいろと良いものを持っていたことになっています。お金もたくさん持っていたでしょう。それでも、この本当に価値のある真珠さえあれば、他のものはもういらない、とこの商人は判断してすべてを売り払って真珠を手に入れています。同じように、パウロの中では、イエス様を知ること、あるいは8節の最後には「キリストを得る」ともありますけれども、いずれにしましても、イエス様との出会いが、どのようなものよりも価値があること、それさえあれば、他はいらない、あるいは、他のものは邪魔になる、このようにまで思えるようになった、ということです。「他の一切を損失と見ています」。とあるのはそのことです。イエス様を知っていることに比べたら、今まで宝だと思っていたあれこれをなくしても一向にかまわない。むしろ、キリストを得て、自分自身がキリストの内にいるものであり続けるためだったら、今まで持っていたものはちり芥と見て全部捨ててしまう、というのです。

生き方である

この所ではっきりとするのは、イエス様と生きる、あるいは、この所の言葉で言いますと、「キリストの内に生きる」とういことは、あれもこれも、というものではなく、あれかこれかだと、パウロが言いきっていることです。本来イエス様と出会うということはそういうことだとパウロはいうのです。ここにおられる多くの方はおそらくそうなのですが、洗礼を受けられた方、信仰告白をされた方は、みな一度はこのようなところを、通っているのです。しかし、そこでなお、パウロ自身がここで明らかにしているのは、キリストを得ることも、キリストの内に生きることも、すでに、今、完璧にそうなっている、というのではないという点です。むしろ、これからいよいよ、そうなっていく、と期待しているようなのです。特に11節の最後の復活に達したい、という言葉は、これからそのようになっていきたい、という強い願いを感じます。私たちは、復活の命をめざすのですけれども、それは、今ここから始まっているとパウロは言いたいのです。今この時の、わたしたちの有り方、教会でのありかた、普段の生活でのありかた、その全体を通して、イエス様とどのような関係を作っていくかということです。もちろん、その場合に、絶対的な基準が存在しています。それが、9節の後半で語られている「義」という言葉です。何を正しいとするか、とういことです。

義とは何か

その場合に、パウロは二種類の義について語ります。一つは先ほども読みました、律法による義です。それは、もっとも単純に言えば、算数の世界です。一足す一が常に二であるように、律法にこうあるから、これをその通り守る、そうしたら正しい、このような意味での正しさです。パウロはまさにこれをやめた、というのです。そしてそれをやめる理由は、もう一つの義に気付いたからです。それはキリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義、とある方の「義」です。ではこの意味での「義」、「正しさ」とはどのようなものでしょうか。実は、ここがおそらく最も大切なことろです。それで丁寧に考えたいのですが、パウロ自身が「キリストへの信仰による義」と言っています。義の根拠は「信仰」だと言います。では、そもそも「信仰」とは何でしょうか。私の持っている信仰、イエス様を信じた、とはどういうことか、という根本的な問いです。いったい信仰とは何か、ということを突き詰めていきますと、多分それは、自分を預けていく、という所に行きつきます。自分でどうにかできないものをあてにすることです。

キリストにかける

これは考えてみますと、かなり怖いことです。何しろ自分でコントロールできません。そして最もコントロールできないのは、神様です。その神様は私たちのためにイエス様を遣わされました。そうしますと信仰とは神様の御心によって現れたキリストにかける、ということです。もう少し丁寧に言いますと、イエス様が神様から、与えられた役割、すなわち、私たちのための救い主としての役割を果たして下さったこと、イエス様のおかげで、神様の前で正しいと言ってもらえるものになっている、この事に自分をかけていく、まかせていくのです。それをずっと、飽きることなく信じ続けること、これが信仰という言葉の中身です。それこそ、ヘブライ人への手紙11章にありますように、信仰とは「見えない事

実を確認すること」（11：1）そのものです。しかし、それはただ、やみくもに、わたしたちが、聖書にかいてあるから、こうなんだ、と思い込んでいる状態ではありません。なぜなら、このような信仰を持つこと、そして、それを神様が正しいと認めて下さること、この全体が、神様によって導かれているからです。そして、実は、このようにして、神様からの働きかけがあって、私たちがそれを受け取って、神様と私たちがお互いに信頼し合う、というこの状態こそが、聖書でいう「義」＝正しさ、です。そして私たちが普段「救われる」と言っているのはこの状態です。

復活に与る、死にあやかる

　そのようにして、わたしたちは、今ここで既に、救われたものなのです。そして、わたしたちが、この礼拝もそうですし、これからも続いていく、教会の礼拝で味わい続けるものが二つある、というのが今日の10，11節で言われていることです。そこでは、二つのことを私たちは知ることになります。それは一言で言いますと、イエス様を知る、ということです。一つは、イエス様の復活の力を知る、ということです。もう一つは、イエス様の、苦しみと死を知る、ということです。苦しみと死と言いますと、怖い感じがします。しかし、まさに、イエス様は、苦しみと死を通して、復活に入れられました。その時、イエス様は、自分に頼るのではなく、神様の力において、死から復活させられました。同じように、私たちの日ごろの歩みも、このイエス様のたどられた道を歩むというのです。わたしたちが、イエス様に信頼して、自分自身に頼らない、その時に、わたしたちは、イエス様の苦しみの無力さを味わうかもしれないけれども、同時に、そこから、復活に導く、神様の力をも、味わうというのです。そのようにして、わたしたちは、終末を超えて死者からの復活にも与っていく、というのです。

追い求めるもの

　最初にお話しましたように、教会は、伝道の器です。神様の道具です。そして、神様の器である私たちの中で、神様の力が働きます。今年の目標の通り、「キリストの命があふれる」教会、となることこそ、わたしたちにとっての、最高の伝道です。わたしたちがキリストを現わすからです。そのようにして、神様のご栄光を現わす教会をこれからも一緒に作っていきたいのです。

祈り

　父なる神さま、み名を賛美します。あなたは私たちの思いを超えてご自身の御業をなされます。教会の迫害者は、最も強力な伝道者になりました。また、私たちも、あなたの不思議な導きによって、それぞれに与えられたときに、あなたのものとされることを覚えるものです。どうぞ、このようにして、集められております私たちが、この事を喜び、最も価値のあるものとして、あなたの義の中に生きられますようにお願いします。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。